

地方発・学習塾発「留学のすすめ」

—グローバル人材を育てたい！

ISC留学net 代表 大場規之
Oba, Noriyuki

地方と首都圏に意識格差あり

海外に目を向け、グローバル人材になることに想いを馳せながら、なかなかその一步が踏み出せない若者。また、その相談をするきっかけや場所を見つからない学生や親。インターネット社会においても、こうした状況は地方都市ではまだまだ多く、地方と都市の情報格差・環境格差は大きくなっている。

地方に行くと、「ただでさえ少ない若者を海外に出して、この地域から優秀な若者がいなくなってしまってもいいのか」といった意味の言葉を耳にする。そうした時に私は、「海外に出て海外で活躍する若者は、きっと日本のために、そして生まれ育った地域のために活躍してくれます。彼らこそ、外との比較ができる地域を伸ばすことのできる一流の戦力です」と答える。

門を閉ざせば衰退することは過去の歴史からも明らかだ。恐れずに外に出て外からのものを受け入れるところに、世界的な動きの中での“地域”的”存在価値と成長がある。今こそ、地方の優秀な人材を海外に出て鍛えるべき時である。政府も様々な取り組みを始めているが、民間から、地域から、できるところから取り組もうという活動の1つがISC留学netである。

社会が求めるグローバル人材とは

グローバル人材育成はどういうことか？「英語が話せるだけではグローバル人材とは言

えない」とはいたるところで聞く話で、医学知識はあるけれども診断や治療のできない医者と同じことである。

では、どのような人材が企業で求められるグローバル人材なのだろうか？その解釈は様々で絶対的な正解は無いものの、総じて以下のようなことが基礎となるようである。

- 英語を中心とした外国語を理解し話せること
 - 日本以外の国の文化や習慣を受け入れ理解しようと努力すること
 - 人種、文化、習慣を乗り越えて様々な人々を認め交流できること
 - 日本の文化や習慣を理解して自らのこととして価値を認めていること
 - 自らの想いや考えを、他人の考えを認めながら伝えることができること
 - 前述のようなことが前提となり、地球・世界的視野で議論や意見交換ができる
- 一つひとつをとっても難しくハードルは高いが、社会や企業が求めるのならばそれに備える教育をしなければならず、自らを取り巻く環境から得する一番の早道は留学だろう。留学をすればすべてクリアできるわけではないが、最も適した手法の1つであることは間違いない。

昔とは大きく異なる留学環境

30～40年前の留学は、日本に残る親との連絡は数カ月に一度、電話で数分やり取りがあるかどうかという環境だったが、今では、毎日無